

20世紀初期のデューイの訪中の背景と当時の人々の反応 ——『デューイが中国で発表した講演』に焦点を当てて——

劉 勝男

はじめに

アメリカ教育者ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) はアメリカの歴史の大転換の時期に、社会による学校に対するチャレンジと需要を真剣に考え、伝統教育の理論と方法を批判し、更にシカゴ大学初等学校の実験教育も行った。彼は長い生涯の中で、現代教育についての探求をやめないと共に、大量の著作と論文を書き、欧米の教育理論と実践に大きな影響を与え、欧米の教育巨匠の地位を固めた。

デューイが20世紀のアメリカ、さらに世界中で最も影響がある教育者の一人であることについては世界中で知られている。その理由は、彼が確実に教育に大きい影響を与え、また、教育領域で重要な改革を行ったからである。デューイはしばしば人に誤解され、50年代にも他の人からの批判を受けたが、60年代以降人々は彼の新しい教育思想に情熱を入れ、より深くそして理性的にデューイの現代教育についての探求を始めた。アメリカの学者であるロックフェラー (Steven C. Rockefeller, 1936-) の言ったように、「50年代より以前の数十年が、デューイの思想が好意的に人々に理解された時期であった。しかし、50年代に入った後、彼の著作に対する人々の早期の広範的な情熱がなくなった。しかし、デューイに対するより広範的な学術理解が20世紀60年代に始まった。80年代になると、再度アメリカの伝統的な哲学思想の価値に人々の意識が向き、その中でデューイの学術成果も認められた」¹⁾。

デューイの教育思想は近代の中国でも広い範囲で認識され、彼は当時近代の中国教育に最も影響を与えた欧米教育者になった。1949年以降の30年の間には、デューイについての研究はあまりなかった。しかし、1979年から、哲学思想や教育思想などでも、中国の学者たちは現実に基づいて冷静にデューイについての研究の大きな成果を獲得し、新たに進展させた。

欧米教育界でも中国教育界でも、デューイの思想研究は基本的な課題である。アメリカの教育学者 R.J. Roth はこのように言っている。「未来の思想はおそらくデューイを乗り越える。しかし、未来の思想家がいかに先人の道としてデューイを通らないことがあろうか。通らないということは想像できない」²⁾。中国の教育史学者である趙祥麟 (1906 -) も以下のように言っている。「伝統的な学校の中で空虚な形式主義があるとしたら、デューイの教育理論は以前のように生命力を持ち、作用を続けていく」³⁾。以上の三者の論述にあるように、デューイについての研究は意味がある。

様々なデューイの著作の中で、彼の中国での2年間の遊歴と当時彼が発表した講演内容はまだ日本では紹介されていない。当時のデューイの講演内容の本稿は見つかっていないが、

デューイが発表した講演の中国語篇『デューイが中国で発表した講演 1919 - 1920』がまとめられており、ハワイ大学出版社はそれを英訳している⁴⁾。この日本語訳はないため、この講演集を日本に紹介し、中国と日本のデューイ比較研究をすることには意義があるだろうと考えている。

1. デューイが中国で講演をした経緯

講演内容を紹介する前に、まずデューイがなぜ中国に講演しに行ったのかについて説明したい。

実際に、デューイが学生に誘われて中国に訪問したきっかけは、1919 年のデューイの日本への旅であったようだ。1919 年 2 月に、デューイと夫人アリス (Alice) は休暇の時間を使って日本に遊歴、講義をすることになった。このことはすぐに彼の中国の学生たち (陶行知、胡適、郭秉文) に知られ、学生たちはすぐにデューイによる中国への訪問可能性についてお互いに相談した。その内容は以下のとおりである。

同年 3 月 12 日、南京高等師範学校の教授である陶行知 (1891-1946) は胡適 (1891 - 1962) に手紙を書いた。「三週間前、デューイ先生は日本に着いて、東京帝国大学で交換教員を担当したことについて聞いた。驚いたけれどもうれしい。どうして驚いたかという、私が二、三年後に計画していたことを日本が先に実行したからである。デューイ先生は東洋を訪ねることによって、おそらく東洋の人々を助けて新しい教育を建設するだろう。彼の学説は大きな影響をもたらすはずだろう。日本と中国は近いので、夏季休暇に我々がデューイ先生を誘えば、デューイ先生は中国へ遊びに来てくれるかもしれない。それが不可能であれば、我々が日本を訪ねることによって、先生と会うことが出来れば良い。このように考えたうれしくなった。だから、すぐこの件について郭先生と相談し、郭先生が日本を経過する時に、直接デューイ先生を誘うことになった。貴方がデューイ先生の訪中を歓迎する手紙を送ってくれたようなので、今回デューイ先生はおそらく中国へ来てくれることになるかもしれない。私も手紙を郵送しようと思う。取りあえず、この件は我々が方針を一つとして進んでいこう。いかがなものか。上海方面の責任者には手紙を書いて、省教育会に相談して詳しく決めよう」⁵⁾。この手紙はこれまでに発見された訪中についてのデューイへの誘いに関する最も古いものであり、とても重要視され研究者にしばしば引用されているものである。この手紙によって、我々は陶行知がデューイの力を借りてそれを中国の力とし、「新しい教育を建設する」⁶⁾ために、更にデューイの思想を中国の広い範囲で紹介しようとしたことが分かる。

更に北京大学、北京高等師範学校、北京女子高等師範学校、尚志学会、新学会五団体が行っていたデューイ一家の歓送会で、二年後に胡適は次のように言っている。「デューイ博士が中国に来たときは、ちょうど中国の大学の改革が始まったところであった。しかし、我々数人の力では弱いため、全国への影響はほとんどなかった。この時デューイ博士の到来が、大きな力となり、我々はようやく様々な場所に影響を与えることができた」⁷⁾。しかし、現有のこの史料についての理解は様々に分かれており、概略すると三つの問題点がある。第一に、デューイは日本の東京帝国大学における「交換教員」として行ったのではなく、遊歴を主として行ったのであり、講演はついでに行ったものであるという点である。このことは既に陶行知による胡適への手紙によって証明された。第二に、手

紙の中で話した郭秉文（1880 - 1969）が直接日本に行ってデューイを誘うことについて、陶行知と郭秉文二人が相談したことは実際のところ以下のものではなかったという点である。論者たちの言うように、郭はわざわざ日本へ行ってデューイを誘ったのではなかった。郭と北京大学の教授である陶孟和（1887 - 1960）はヨーロッパで戦後の教育状況を考察するため赴いたのであり、その途中で日本に経由した時にデューイを中国へ誘うことになったのである。第三に、この手紙は現在において、デューイを中国への講演に誘うための最も古いものであるため、しばしば研究者たちは以下のような誤解をするという点である⁸⁾。すなわち、デューイが東洋に遊歴することを知っていた最初の人が陶行知であると考えるのである。そして、陶行知が胡適にその旨を伝えたと誤解するのである。しかし、ここには問題がある。もしそうであるならば、陶行知が胡適への手紙の中で書いた「貴方がデューイ先生の訪中を歓迎する手紙を送ってくれたようだ」という一文を理解しづらくなる。合理的に推測するならば、胡適こそデューイが日本にいることを先に知っていた者であり、彼が初めにデューイに手紙を書いて彼を誘い、陶行知にも手紙を送ったのであり、その後彼らはデューイの訪中について詳しく相談することになったのである。しかし、前に引用した手紙は陶行知からの胡適への返事であり、残念ながら胡適が陶行知に送った手紙は今日には残っていない。

コロンビア大学の中国人学生である胡適と郭秉文の熱い要望を受けて、デューイは好意的に中国への訪問を決定した。更に彼は陶行知に手紙を書いた。「君の手紙をもらって、とってもうれしかった。私は毎日手紙で我々の中国への思いを伝えなかった。君が話したように、私が中国で講演できるならば、それは光栄なことだ。このことを通じて、いろいろな面白い人と出会うことができるだろう。中国で何回講演するとしても私の行程にあまり影響がないと思う。」デューイはもともと5月中旬に中国に少しの間遊歴して、また日本を経由した後、アメリカに帰るつもりであった。しかし、郭秉文と陶孟和は直にデューイに中国で一年間住むことができるかどうかを尋ねた。デューイは手紙の中で以下のように返答した。「この提案は良いアイデアだ。両方の大学に問題がなければ、私も講演をしたい。数ヶ月という短い旅行では確かに何も調査することができないと思うが、一年間を使うことができれば、少しは観察ができるだろう」⁹⁾。陶孟和は直ちにデューイに会える予定となったことを陶行知に知らせ、彼は胡適、蔣夢麟（1886 - 1964）、陶行知と会い、デューイの中国での具体的な行程について相談した¹⁰⁾。陶行知は郭たちからの知らせを受けた当日、デューイの訪中について手紙で胡適と相談し、北京大学、江蘇省教育会、及び南京高等師範学校の三つの学校からそれぞれ一人を推薦し、デューイの訪中時の担当者に決めた。南京高等師範学校の代表は陶行知となり、デューイの接待についても数条を考えた。胡適は北京大学総長である蔡元培（1868 - 1940）、江蘇省教育会責任者である沈恩孚（1864 - 1944）、及び蔣夢麟とデューイを接待の方法について相談した¹¹⁾。

同年4月、デューイは日本での講演活動を終えて、中国を訪れた。デューイの訪中は、デューイと彼を誘った中国の人々がお互いを認めることにより、達成された。更に、彼の訪中は胡適、陶行知、郭秉文、及び蔣夢麟などのデューイの学生たちが促進させたものであった。

2、講演の概要と社会教育に関する講演内容

(1) 講演の概要

第一章ではデューイの訪中の経緯について考察した。次に、彼が中国で発表した講演の概要について検討したい。デューイは中国での2年間の滞在の中で、約200回以上の講演を行い、その中の61篇の講演は『デューイが中国で発表した講演』(John Dewey 著、単中恵ほか編『デューイが中国で発表した講演』教育科学出版社、2006年)として編纂されている。その講演内容の範囲は、教育哲学、社会教育、学校教育、平民教育、職業教育、大学教育、現代教育、倫理教育、学生自治と教師の職責など10方面にわたっている。この本によって、人々は20世紀20年代のデューイの中国における教育活動と彼の思想について知ることができる。

デューイが中国で発表した講演の中でも特に社会教育について詳しく紹介したい。なぜなら、デューイの訪中以前の中国において、近代の社会教育という概念はあまり普及していなかったが、デューイによる社会教育についての講演によって中国における近代の社会教育が啓蒙されたと考えるからである。デューイの講演後、彼の思想を紹介する著書が多く中国において出てきた。例えば、『*The School and Society*』『*Experience and Education*』『*Democracy and Education*』などを中国語に翻訳した著書である。中でも『民主主義と教育』は師範学校の教育学の教材として広範的に使われるようになった。彼の影響を受けていた陶行知は再度中国の近代社会教育について考えた。この時期に、「生活即ち教育、社会即ち学校」といった彼の特徴的な教育思想が出てきた¹²⁾。更にデューイの実用主義を推進することによって、中国における現代実用主義哲学が発展した。

(2) 社会教育に関する講演内容

デューイの教育思想体系の中で、教育と社会の関係は一つの重要な側面である。デューイは中国で行った講演の中で、しばしば「教育と社会」をテーマとして、教育と社会との関係、また学校と社会との関係の重要性を強調した。「社会教育」をテーマとする章の中には、デューイが発表した社会教育についての講演が13篇ある。

これらの講演の中で、デューイが主に論述したのは以下の五つの点についてである。

第一に、教育は社会のためのものということである。「教育と社会との関係」、「教育と社会進化との関係」、「学校教育が社会生活と繋がる必然性」の三つの講演の中で、デューイは以下のように示唆した。「教育の基本観念、目的と方法は社会のためであり、社会の全体状況に相応するべきものである。以前の教育は社会の概念に着目しない教育であったが、現在の教育は社会を幸せにする教育であるべきだ。従って、学校を設置する目的は個人の幸せのためではなく、社会の幸せのためであり、更に人々が社会の幸せを増やす機会を持つようになるためのものである。学校教育はまさしく社会進歩のためである。具体的には、社会の健康、社会の経済、社会の交流、社会の民主などである。従って、もし今後の社会の状況を予測しようとするならば、現在行っている教育を見さえすれば良い」¹³⁾。更にデューイは「教育と社会進化との関係」の講演の中で、以下のように指摘し

た。「第一に、社会の健康を重視することが重要である。すなわち、国民の健康である。体育と知育そして徳育との緊密な関係である。社会の人民の健康を促進することは中国にとって最も重要なことである。第二に、社会の経済状況にも教育者は注目しなければならない。経済が整っていれば、何でもできるからである。いかにして中国の経済を発達させるかという、最も依頼できるものは機械である。中国の経済をよくしたいとすれば、大きな工場を建てると良い。そして小規模の工場を改良することも重要である。しかしながら、上述のことを実現するのは教育にかかっている。すなわち、いかに学生を育成するかということが問題の鍵である。第三に、社会の自治の程度である。この国の政体を自治的な政体とさせるためには、その国の人々が自治できるようにしなければならない。教師は学生を教える時に、それぞれの学生自身の特徴に基づいて教育し、学生による完全な自治を目的として教育するべきである。すなわち、人民身体の健康、社会経済の充実、及び自治のでき具合の三点がすべて進行したならば、社会は自然に進化、更新することができる。以上のすべてのことの基礎には教育がある」¹⁴⁾。

第二に、国家は教育を重視する必要があるということである。「社会進化」、「学校と社会」の講演の中で、デューイは以下のように言った。「国を発展させるなら、教育を発展させるのが最も重要なことである。具体的な方法は、学校を設置し、教師を育成し、教授方法を改良することなどである。教育は国を救う基礎となるものであり、すべての問題を解決することができる。その上、教育は民衆全体の生まれつきの能力を完全に掘り起こすことができるものである。教育の中には注意すべき要素が三つある。第一に教育の普及を求めること、第二に学校が社会の縮図になること、第三に教材内容と現代という時代の間に緊密な関係を作ることである。社会の発展と国の幸せにとって、人々の教育と発展は最も重要なことであり、小学校教育と平民教育を重視しなければならない。更に女子教育と貧困地域の教育も重視しなければならない。もし国の発展を望ましいと考えるならば、教育の普及が必要なこととなる」¹⁵⁾。更に、デューイは「学校と社会」の中で、再度女子教育の重要性を強調した。「なぜ女子教育をしなければならないかという、第一に、女子人口は人民全体の半分であり、半分がよくなれば、全体も自然によくなるであろうと考えるからである。第二に、個別的に見ると、現在の女子は未来の母親であるからである。彼女らは未来の子どもを教育する責任を持っている。もし家庭教育が足りなければ、学校教育の責任は重くなるだろう。それと同じく、もし母親の教育程度が低くなって、家庭以外のことが分からなければ、子どもたちはおそらく良い人材になることができないだろう」¹⁶⁾。

第三に、社会の変化は教育に影響を与えることができるということである。「教育の社会的要素」、「専門教育の社会観」の講演の中で、デューイは以下のように示唆した。「伝統的な教育を改革しようとするれば、社会の問題について研究しなければならない。具体的に言うと、世界の時流を詳しく研究することである。第一に工業革命、第二に民主主義である。従って、学校教育は世界の時流に従って改良すべきものであり、社会の発展の要求に相応するべきものである。もしそれに反すれば、結果として、おそらく学生が無知になったり、国が不幸な災害と戦乱の中に滅びることとなるだろう。だからこそ、教育は社会の背景と社会方面の関係を考えなければならない」¹⁷⁾。更に、デュー

イは「専門教育の社会観」の講演の中で、五四運動についての感想も述べている。「去年、私は中国に訪れた。その時はちょうど五四運動の時期であった。当時の学生たちを見て、大きい刺激を受けた。数千万人の学生は国事のためにいくらかの大きな犠牲を受けていた。このように、国のために死ぬことは容易である。一方で、国のために生きるとは難しいことである。五四の犠牲はあったけれども、それによる国にとっての利益は大きくなかった。国のためよく生きていればこそ、国を救うことができるだろう。国を救うことは短い時間でできることではなく、長い時間がかかることであり、それには生きることが必要であるからである。我々は自分の能力を試すため、専門的な学問を学習することと社会を創造することについて工夫をしなければならない」¹⁸⁾。

第四に、学校科目と社会変化の関係についてである。「学校科目と社会の関係」、「青年の教授原理」の講演の中で、デューイは以下のように言っている。「学校の教育と学校以外の教育を一致させるべきだ。民主主義の社会では、学校が科学を重視し、更にそれを学生の判断力、発明力、及び観察力を鍛える最も良い方法として用いるべきだ。学校の基礎科目は社会の要求に相応するものであるべきことを知らなければならない。実際の教育は学生にきちんと社会の状況を知らせるべきである。社会にどのような変化があっても、教える科目はその社会の要求に従っていく必要がある」¹⁹⁾。更に、デューイは「青年の教授原理」の講演の中で、子どもを教える現状、目的、及び注意すべき事項について以下のように指摘している。「子どもを教える現状の場面について言えることに二つある。第一に、子どもにとって家庭で学んだ知識の日常生活における必要なものであること、第二に、子どもにとって学校で学んだ知識の多くは使えないものであることである。子どもを教える目的には二つある。第一に子どもに必要なことを知らせることによって学習を自主的にさせること、第二に学習することによってそれを応用させることである。上述したことと関連して、子どもを教える時に注意すべき事項には五つある。すなわち、学校近郊の状況、児童の家庭状況、児童の心身の状態、すべての児童にとって必要である知識、いかにして児童が生活する環境と児童との関係を作るかという五つの点である」²⁰⁾。

第五に、学校行政と組織は社会の要求に相応しなければならないことである。「教育行政の目的」、「中国の学校の教科の問題」、「アメリカ教育会の組織とその組織が社会に与える影響」の講演の中で、デューイは次のように示唆した。「各地教育管理者は彼らの学校を現地の状況に相応させることに注意すべきだ。そうしなければ、何も達成することができない。教育行政の役割は、世界の状況を研究することである。社会の状況を研究した上で、更に如何に社会を進歩させるのかについて研究しなければならない。中国は中国独自の教育を持つべきであり、その上で、各国の教育を観察し学習する必要もある。つまり、教育行政者は社会の要求を研究するべきだ。例えば、人民の健康の促進、国民の経済能力の向上、余暇の利用方法を提案するなどである。学校の進歩を求めながら、更に社会の進歩を目指していくべきだ」²¹⁾。更にデューイは「教育行政の目的」の講演の中で、社会の需要について以下のように指摘した。「社会の需要には三つある。第一に、いかにして人民の健康レベルを向上させるか。いかにして人民の体をよく動かし、積極的な人格にさせるのか。第二に、いかにして人民の経済能力を向上させ、良い人材を作るのか。第三に、いかにして人民に高尚な娯

樂を与え、余暇の時間を利用することによって有益であり高尚な嗜好を持たせるか。上述したことはすべての社会の需要を含んではないが、社会進歩の基礎とはなっている」²⁹⁾。

3、当時の人々の反応

(1) 新聞・雑誌界の反応

五四時期の新聞と雑誌を読むと、最も注目される現象としてはデューイが訪中した時、それに関して新聞・雑誌に載せたものが数多かったということである。例えば、「朝新聞」、「新青年」、「新潮」、「毎週評論」、「民国朝刊・覚悟」、「時事新報道」、「新教育」などの新聞・雑誌はデューイの講演内容を大量に載せた。

デューイが北京で行った一系列の講演内容はほぼ全部「朝新聞」に記録され、短い講演内容でさえも載せられた。これらの講演内容の中には数日の連載、また数十日の連載のものまでもあった。それによって、読者は実用主義について学習する時に、とても便利に感じた。デューイによる同じ講演内容は数冊あるいは数十冊の新聞・雑誌に載せられることもあった。それによって、彼の思想は広い範囲で人々に認識された。デューイの講演内容を載せると同時に、多くの新聞・雑誌はデューイの訪中行程、デューイの談話、デューイの講演の要点、デューイの写真、デューイの講演に関する広告、デューイの生涯、デューイがアメリカで発表した講演の翻訳稿などの内容を大量に載せた。デューイは当時の人々の注目の的になった。また、デューイの訪中の講演集が図書の形として出版された。1920年8月、朝新聞社はデューイが北京で行った五大系列の講演内容を『デューイの五大講演』という図書の形で全国に発行した。デューイが中国から離れる時まで、この図書は既に13版に至るまで刊行され、毎版1万冊以上の発行量であった。その後、この図書はそれから更に多く印刷され、しばしば出版史上の奇跡と言われた。『デューイの五大講演』以外にも、この時期には『デューイの三大講演』、『デューイ訪中講演集』などのデューイの講演稿も出版された。

(2) 学術界の反応

デューイの訪中は、当時の中国の学術界に大きな反応をもたらした。哲学界はもちろん、最も反応が大きかったのは、中国の現代実用主義者たちによるものであり、現代実用主義はそれによって発展した。

胡適はデューイの実用主義を最も形を変えることなく継承した中国人の学生であった。彼が注視するのは実用主義の実証精神と実証方法である。「実用主義」という論文の中で、胡適は何度も実用主義の「実験的態度」、「実験室における科学的方法」について強調した。彼は「Pragmatism」という言葉を「実用主義」と翻訳した。この翻訳は胡適が実用主義を正確に理解していたことを証明している。胡適によれば、実験の方法は具体的な事実と環境から入手するものへの注意することによって、多くの偽問題を避けることができる。更に、無意味な論争を避けることもできる。一切の理論を仮定として見ていくことによって、多くの「古人によって従わされている奴隷」的考え

方を解放することができる。彼は一切の理論を実践によって実験すべきことを主張した。更に、彼は実験主義の方法を「大胆に仮定し、繊細に実証する」²³⁾ ことと概括した。今まで述べてきたことは全部、胡適が「実証的」な事実、すなわち、経験的事実と実証的材料に注意したことを証明している。胡適自身もしばしばこの実証主義の方法と実証を伴わない理論に対する批判的精神を充分に利用し、研究を進めた。胡適は中国においてデューイに続く実用主義の中堅人物になった。このように、デューイの実用主義は中国の現代実用主義の発展を促進させる作用を与えた。

終わりに

ここまで、20 世紀初期のデューイの訪中の背景と当時の人々の反応について、『デューイが中国で発表した講演』に焦点を当てて考察してきた。第一章では、デューイが中国で講演をした経緯について検討した。そこから分かったことは、デューイの訪中が、デューイと彼を誘った中国の人々がお互いを認めることによってはじめて達成されたものであることである。更に、彼の訪中は胡適、陶行知、郭秉文、及び蔣夢麟などのデューイの学生たちが促進させたことであったということが明らかになった。第二章では、講演の概要と社会教育に関する講演内容について考察した。(1) では『デューイが中国で発表した講演』の内容が教育哲学、社会教育、学校教育、平民教育、職業教育、大学教育、現代教育、倫理教育、学生自治と教師の職責など 10 方面にわたっていることについて整理し、(2) では『デューイが中国で発表した講演』の具体的な内容の五つの部分について検討した。第一に、教育は社会のためのものということである。第二に、国家は教育を重視する必要があるということである。第三に、社会の変化は教育に影響を与えることができるということである。第四に、学校科目と社会変化の関係についてである。第五に、学校行政と組織は社会の要求に相応しなければならないことである。以上の側面から『デューイが中国で発表した講演』の内容を考察した。それによって、デューイの中国で発表した講演内容の特色が分かった。すなわち、中国の当時の国情に基づいて、社会と教育、学校と教育などについて講演を行ったということである。第三章では、デューイが講演した当時の人々の反応について (1) 新聞・雑誌界の反応と (2) 学术界の反応に分けて考察した。(1) では、デューイが訪中した時、彼の講演内容を新聞・雑誌などに載せたものが数多かったということが分かった。(2) では、デューイの実用主義は中国の現代実用主義の発展を促進する作用を与えたことが分かった。

今後の課題としては、以下のことが考えられる。『デューイが中国で発表した講演』には本稿で論述した社会教育の他に学校教育、教育哲学、平民教育、職業教育、大学教育、現代教育、倫理教育、学生自治と教師の職責についての講演内容が紹介されている。したがって、これらについても検討することにより 20 世紀のデューイの講演が中国に与えた影響についてより広い視点から見ていきたい。更に、同時期の日本におけるデューイ研究について考察し、その内容と本稿で考察してきた中国におけるデューイの講演内容との比較も行いたいと考えている。

[注]

- ¹⁾ Steven C. Rockefeller, *John Dewey Religions Faith And Democratic Humanism*, Columbia University Press, New York, 1991, Preface, p.1.
- ²⁾ R.J.Roth, *John Dewey And Self-Realization*, Prentice-Hall, Inc. , New York, 1962, Preface, p.2.
- ³⁾ 趙祥麟「実用主義思想についての見直し」華東師範大学学报(哲学社会版)、1980年第2期、28頁。
- ⁴⁾ *John Dewey, re-translated back into English by Robert W.Clopton and Tsum-chen Du.Honolulu, Lecture m China 1919-1920, The University-Press of Hawaii, 1973.*
- ⁵⁾ 中国社会科学院近代史研究所中華民国史組編『胡適来往書信選 上冊』中華書局、1979年、29頁。
- ⁶⁾ 同上。
- ⁷⁾ 梁啓超「五団体が主催した宴会時におけるデューイの発表言論」朝新聞、1922年7月1日第7版。
- ⁸⁾ デューイ研究者である元青は2002年第2期『近代史研究』の133頁に発表した「デューイの中国への旅とその影響」という論文の中で以下のように指摘している。即ち、「陶行知が胡適より3週間前にデューイが日本にいったことを知り、胡適に手紙を送った。」ということである。
- ⁹⁾ 北京大学日刊、1919年3月28日。「両方」の大学とはコロンビア大学と中国での講演予定の大学を指している。
- ¹⁰⁾ 北京大学日刊、1919年3月27日。
- ¹¹⁾ 中国社会科学院近代史研究所中華民国史組編『胡適来往書信選 上冊』中華書局、1979年、34頁。
- ¹²⁾ 呉健敏「デューイの教育思想が21世紀の中国教育改革への影響」『教育評論』2001年第6期、96頁。
- ¹³⁾ John Dewey 著、単中恵ほか編『デューイが中国で発表した講演』教育科学出版社、2006年、145頁。
- ¹⁴⁾ 同書、150—152頁。
- ¹⁵⁾ 同書、145頁。
- ¹⁶⁾ 同書、162頁。
- ¹⁷⁾ 同書、145頁。
- ¹⁸⁾ 同書、156頁。
- ¹⁹⁾ 同書、146頁。
- ²⁰⁾ 同書、176 - 177頁。
- ²¹⁾ 同書、146頁。
- ²²⁾ 同書、167 - 168頁。
- ²³⁾ 中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『胡適の日記(上)』、中華書局、1985年、113頁。